

栃尾紬アーカイブの構築

Construction of Tochio Tumugi archive

菊池 加代子
KIKUCHI Kayoko

小林 花子
KOBAYASHI Hanako

キーワード：織物、栃尾紬、絹織物、着物、繭
Keywords：textile fabric, Tochio Tumugi, silk weave, kimono, cocoon

In Tochio, Nagaoka City, Niigata Prefecture, silk fabrics have been woven for a long time. From sericulture, thread making, dyeing, and weaving were done at home to cover the clothes worn by the family. This study is a record of a very beautiful cloth called Tochio Tsumugi.



「栃尾の手織物と絹文化」ポスター

1. はじめに

新潟県長岡市栃尾では、「栃尾紬」と呼ばれる絹織物が作られていた。「栃尾紬」は越後の紬の中でも歴史はもっとも古いと言われ、家内で自給自足の平常着として作られていたものが、江戸時代には、栃堀村の里庄、植村角左衛門により郷土の産業として絹織物生産を奨励し、越後の特産品として全国に名を馳せたとされる。当時から農家の副業として、家内で技術を伝えながら栃尾全域に渡り生産が行われていた。しかしながら時代の変化と共に、自動織機による化学繊維を用いた先染織物の産地に変化し、農家の副業としての絹織物は昭和の中頃を境に生産が縮小した。本研究では、「栃尾紬」を栃尾の織物の歴史と地域の遺産として再認識し、その魅力と価値や技術、それらが行われてきた背景などを後世に伝える事を目的とし、この地域で育まれた手織物と絹文化にまつわる資料を発掘、調査し記録することを2020年より3年計画で行う。本報告は、初年度研究の中核をなすものとして長岡市栃尾美術館（以後、栃尾美術館）を会場に、栃尾紬を紹介する事と情報収集を目的に開催した「栃尾の手織物と絹文化」の展示と収集出来た情報を中心に記す。

2. 「栃尾の手織物と絹文化」概要

- 名称 長岡市栃尾美術館「開館25年のあゆみ展」特別企画「栃尾の手織物と絹文化」
- 会場 長岡市栃尾美術館 展示室II
- 会期 第1期 2020年8月18日(火)～9月27日(日)
第2期 2020年10月6日(火)～11月23日(月)
- 主催 栃尾の手織物と絹文化研究会(長岡造形大学 菊池・小林研究室)
- 協力 長岡市栃尾美術館・新潟県立歴史博物館・長岡市立科学博物館
- 後援 長岡造形大学・栃尾織物工業協同組合・かざぜん(株)



フライヤー 裏面

本研究と展示の目的が伝わりやすいように栃尾美術館の広報とは別に独自でポスターとフライヤーを作成した。

3. 展示内容

- ・第1期
一之貝、渡邊家と外山家の織物を中心に、長岡市栃尾農

林業資料館に保管されている機道具（高機、座繰機など）と、長岡市指定有形文化財「一之貝百二十・十の字拵」、長岡市指定有形民俗文化財の「栃尾紬標本」など、栃尾市史を始めとする旧栃尾市で編纂された文献で確認できる資料の展示をした。また、現在も栃尾で一軒、栃尾紬の伝統を受け継ぎ生産を行うかざぜん株式会社の風間氏に協力を仰ぎ、織物、素材、道具、写真などの資料を加え、鑑賞者が絹織物にまつわる記憶を呼び起こすことができるような構成を目指した。

1期出品内訳：着物類 18点、帯類 7点、着尺 3点、
端切れ 3組 16点、道具 9点、素材 6点、
写真 1点、標本 1点



写真1 第1期展示風景

・第2期

1期展示期間に調査を進め、収集した新しい情報・資料を追加することで、養蚕・糸作り、染め、手織りという一貫の工程が栃尾全域で行われていた事実とその生活の様子が具体的に見える展示を試みた。道具、端切れ、映像を追加し、一之貝の渡邊レイ氏(1908年～1972年)、外山家、繁窪の山本家のそれぞれの物語をパネルで紹介し、展示資料の背景、家ごとの特徴も同時に伝えられるよう展示構成を変更した。

第2期出品内訳：着物類 15点、帯類 5点、着尺 8点、
端切れ 4組、道具 7点、道具箱 2点、
素材 7点、写真 2点、標本 1点、
小物 2点、箆筥 1点、映像 1点



写真2 第2期展示風景

・パネルとキャプションの追加

第1期展示に合わせて一階エントランス付近に展示紹介パネル、展示室Ⅱ入り口付近に挨拶文、キャプションを作成した。最低限の情報を表示し、情報提供を求めるという設定からスタートしたが、返って展示の目的が鑑賞者に伝わりにくい状況を生んでいると感じ、調査した情報も加え、第1期後半からキャプションとパネルを追加した。

第2期展示では、各家の物語、集落の模様の違い、拵模様の見どころ、各道具の説明などパネル数を増やし、展示物それぞれの説明を入れたキャプションに入れ替えをした。

4. 展示の効果

会期中に栃尾美術館に寄せられた情報は、会期以前に広報の段階で5件、会期中には美術館に直接寄せられ記録のある情報だけで26件、展示以降2020年度中に調査につながった件数を合計すると50件を超える。情報の内容の多くは栃尾で織られた着物、反物、端切れを所有しているというもので、それらの織られた地域、織り手など、資料の背景に関する情報提供も同時に期待できるものだった。養蚕、糸作り、染色、機織りの経験談と織り手の紹介、栃尾の織物の歴史と人物に関連する資料の提供などがあつた。

5. 調査と活動

・調査

展示計画にあたり、渡邊家、外山家、かざぜん株式会社、染色・織物製造会社、NPO法人UNE等への聞き取りの他、栃尾支所が管理する道具類、長岡市立科学博物館所蔵の資料について事前に調査を行なった。

会期前の7月には「栃尾支所からのお知らせ」をはじめとする栃尾美術館の広報によって栃尾紬に関する情報が寄せられたため、栃尾美術館のアトリエを利用し、資料をその場で広げ所有者から話を伺うなど、研究者が揃って聞き取りができるような方法と、個別に所有者宅に伺い、現地での聞き取りを行う方法で調査が進められた。会期が終了するまでに行なった調査は概算で9件12回(対象者14名)、会期終了後から2021年3月31日までに行なった調査は約6件(対象者12名)を超える。情報提供者は織物等の個人所有者、家で養蚕・糸作り・機織りをしていた方とその家族、栃尾紬産業に携わっていた方、郷土史研究者、など多岐にわたる。栃尾に居住する方々が中心で次の情報提供者への紹介につながるケースが多かった。



写真3 山本家箆筥調査 2020年9月3日



写真4 アトリエでインタビュー 2020年10月24日

栃尾美術館のアトリエに栃尾紬研究会世話役、郷土史研究家、栃尾紬産業に携わっていた方に集まって頂き、インタビューを行った。



写真5 栃尾支所所蔵 道具箱 西中野侯



写真6 剣持トシ氏 端切れ

一之貝剣持トシ氏(1926年生まれ)の道具、端切れ、反物、糸等と小学生が剣持氏宅で糸繰りから機掛け、織作業までを見学している映像資料を確認し、第2期に展示した。

・DVDの編集

調査の過程で一之貝拵の作業工程を小学生が見学する様子を旧一之貝小学校教諭が撮影したVHS映像の提供があり、後期展示に活用する計画になったが、DVDに変換したそのままでは上映するには良い状態とは言えず、長岡造形大学視覚デザイン学科教員と教務補助職員の協力を得て最低限のノイズカットと色補正、タイトル等文字情報の挿入を行なった。補正を行うことで見づらさは改善したが、60分の上映時間について鑑賞者から長すぎるとの声が聞かれた。今後の調査と展示のために短縮版の作成を検討することとした。

6. 初年度の研究でわかったこと

栃尾は、繭の産地であった事がわかった。70才以上の人の話として、殆どの家で農家の副業として養蚕を行っていた。自宅に蚕部屋があり、春から秋まで3~4回養蚕を行った。家族総出で子供も手伝いをした。小学校の帰り道に桑の実を食べて帰った事、すきっこ(繭を作る直前に蚕が透き通った状態になるのでその様に呼んでいた)になると、まぶし(繭を作る場所)に移す手伝いをした。

養蚕を行い、よい繭は繭市場に出荷し、不良の繭とその年に必要な量を自家用に残した。繭は、主に群馬県に出荷された。

養蚕・繭市場への出荷で終了する家もあれば、その後、糸作りや真綿作りをして糸や真綿で現金収入を得る家、自家製の糸を持参して織の上手な人に織ってもらう家もあった。また、養蚕から糸作り、染色、織り、仕立てまでを一貫して行う家庭など、色々な関わり方があった。

養蚕は、家族総出であったが、殆どは繭から先の作業は女性の仕事であり母から娘へその技術は伝えられた。義母から嫁に伝えられた家庭もあったが、女性が家事を行う様に栃尾紬を作っており、女性の冬の間の仕事として現金収入を得る大切な営みであった。

冠婚葬祭用の紋付着物や羽織、袴、着物は単、合わせや綿入、寝巻き、ねんねこ、亀の甲、座布団地など、生活に必要なものは殆ど織っていた。



写真7 渡邊家 さまざまな布



写真8 山本家 亀の甲やねんねこ

栃尾体育館倉庫、長岡市農林業資料館に織機や道具が保管されていることがわかったが、調査は不十分であるので今後の課題である。

栃尾市史別巻Ⅰ P. 750「田之口の黄縞、森上の無地、栗山沢の黒地、黄格子、黄八丈、荷頃の千筋、赤谷の大柄、中野俣の鼠縞、一之貝の緋等殆ど栃尾郷全域にわたって農家の副業として生産されていた。」と記されているが、現時点では、一之貝の緋は確認ができたが、他の地域ではデザインの特徴を確認する事ができていない。

栃尾紬は、繭から引いた生糸を精練して織ったもの、玉繭から引いた節のある糸で織った物、真綿から紡いだ糸で織った物、自動製糸した糸で織った物があり、栃尾紬の定義を説明することは困難である。

7. 今後の展望と課題

本展示中に寄せられた情報から新しく調査した資料は、2年度目に栃尾美術館の企画展併催という形で、地域の方々への報告とさらなる情報収集を目的として展示を行うこととした。

展示終了後は、継続的に情報提供の呼びかけを行う目的でチラシの作成を行なった。調査の中で提供された情報の幅が広くなり、織物だけではなく、紙資料、道具、素材、写真などを参考として掲載し各所に配布した。

今後は、引き続き資料を調査、整理し記録集を編集する計画である。当時を知る人々はお元気で居られるが高齢であるので、証言の記録は急がねばならない。

ほとんどの資料は、蔵や箆笥に入れられたままで保管されている。現在では、集めた資料を一括して保管する場所がない。貴重な資料が散逸、廃棄されないように持ち主の方々大切に保管をして貰える方法の検討が必要である。

記録集の編集は今後の研究の中心となる。

栃尾の人々はもとより長岡市民にとって、地域の誇りとなるような記録を作成したい。



情報提供を呼びかけるフライヤー

謝辞

さまざまな情報をお寄せくださいました皆様に感謝を申し上げます。また、本研究にご理解を頂き、展示室やアトリエの使用、また情報収集の窓口になって下さいました長岡市栃尾美術館の皆様にも感謝を申し上げます。

勤勉に誠実に製作し喜びや愛情を感じられる栃尾紬に出会い、製作に携わった栃尾の皆様へ尊敬の念を強くしております。

参考文献・資料

- 1) 菊池加代子・阿部充夫・吉田勝幸：渡辺家で織られた 栃尾紬 長岡造形大学研究紀要第15号 2017年
- 2) 土田邦彦：越後の伝統織物 野島出版 1980年
- 3) 土田邦彦：新潟県織物史 野島出版 1990年
- 4) 栃尾市史編集委員会：栃尾市史上・中・下巻、別巻Ⅰ・Ⅱ 1977～1981年
- 5) 栃尾織物工業協同組合：栃尾と織物 栃尾織物工業協同組合 1968年
- 6) 素朴な手織り美「越後・一之貝緋」：染織と生活 No15号 1976冬 染織と生活社 1975年
- 7) 栃尾市教育委員会：栃尾の文化財 1984年
- 8) 栃尾市行政管理課広報広聴係：とちおの文化財 23 広報とちお 2003-2 2003年
- 9) 長岡郷土史研究会：長岡郷土史 1960年
- 10) 栗山清次郎：栃尾案内 栃尾織物同業組合 1916年
- 11) 栃尾織物一日会：栃尾織物案内 1922年
- 12) 長岡市科学博物館ホームページ https://www.museum.city.nagaoka.niigata.jp/know_more/bunkazai_site/〔最終閲覧日 2022年1月11日〕
- 13) 長岡市ホームページ <https://www.city.nagaoka.niigata.jp/kankou/rekishi/shiseki/tumugi.html>〔最終閲覧日 2022年1月11日〕
- 14) テックナガオカホームページ <http://www.tech-nagaoka.jp/traditional/trad005/5>.〔最終閲覧日 2022年1月11日〕

新聞掲載

- 1) 2020年10月15日新潟日報 そいがあて10月号 長岡歴史散歩「栃尾の手織物と絹文化」寄稿
- 2) 2020年10月15日朝日新聞 「栃尾紬 記録と記憶を後世に 栃尾紬の資料を研究者が収集」 <https://www.asahi.com/articles/ASNBG7767N9KUOHB00Q.html>
- 3) 2020年10月31日 新潟日報 「栃尾紬の技術保存へ造形大教授ら研究会設立」
- 4) 2020年10月31日 新潟日報おとなプラス 特集記事として「栃尾紬手仕事の文化」

追記

本研究初年度は、新潟県立歴史博物館 陳玲専門研究員、大楽和正主任研究員を共同研究者として研究を行ない、長岡造形大学特別研究費と一般財団法人日本蚕糸会「貞明皇后研究助成」の助成を受けて実施した。